

ヴィクトリア朝後期における フォークソング収集

Folk-Song Collecting in the Late Victorian Period

廣 瀬 絵 美

HIROSE Emi

[要旨] イングランドでは、1870年から1890年の間に、田園に残る古い歌を収集することへの関心が中流階級の人々の間で高まった。これは、当時台等していた考古学や人類学に加え、進みゆく都市化や産業化による不安への反映とも関わっている。サビン・ベアリング＝ゲール（1834-1924）、フランク・キッドソン（1855-1926）、ルーシー・ブロードウッド（1858-1929）、ケイト・リー（1858-1904）といった先駆者たちによって、フォークソングは収集され、出版された。フォークソング収集は当初は個人の活動に留まっており、徐々に、情報交換や個人的な関わりを通してネットワークを形成するようになった。

先行研究では、マルクス主義の観点から、ヴィクトリア朝後期のフォークリヴァイヴァルは労働者階級の文化であるフォークソングを知識階級が搾取しブルジョワジーの市場に取り込んだとして批判されてきた。しかし、本稿ではフォークソング収集に影響を与えた社会的・歴史的コンテクストを探り、フォークソング収集家の経験やフォークソングをめぐる考え解釈し、収集家と歌手の関係性を明らかにする。ヴィクトリア朝フォークソング収集は実践的な文化・社会運動であり、性別や階級の垣根が強かったヴィクトリア朝社会を考えるとフィールドワークを通じた交流は、非常に革新的な試みであったという事を論じていく。

[キーワード] フォークソング、伝統、フォークソング収集家、フィールドワーク

[Abstract] In England, from around 1870 to 1890, there was a growing interest amongst the middle classes in start collecting old songs from the countryside. This was clearly linked to the new interest in archaeology, and anthropology that arose around this time, and which also reflected anxieties towards the pressure of urbanisation and industrialization. During this period, folk songs were collected and published by pioneers such as Sabine Baring-Gould (1834-1924) Frank Kidson (1855-1926) Lucy Broadwood (1858-1929) and Kate Lee (1858-1904). Although the folk-song collecting began with individuals, it gradually developed into a wider network through the exchange of information and personal contacts.

In previous Marxist studies, the late Victorian folk-song revival had been criticized as a bourgeoisie appropriation of rural-working class culture. However, this paper aims to provide a new different perspective, by exploring the social and historical contexts that influenced folk-song collecting, interpreting each folk-song collector's experience and their diverse ideas about folk songs, and revealing the relationship between song collectors and singers. I argue that late-Victorian folk-song collecting was a practical social and cultural movement, which challenged class and gender boundaries.

[Key Words] : Folk Song, Tradition, Folk Song Collector, Singer, Fieldwork

I はじめに

1880年代から1890年代の終わりにかけて、イングランドでサビン・ベアリング＝グール(Sabine Baring-Gould, 1834-1924)、ルーシー・ブロードウッド(Lucy Broadwood, 1858-1929)、ケイト・リー(Kate Lee, 1858-1904)、フランク・キッドソン(Frank Kidson, 1855-1926)らによって、フォークソングの収集が活発に行われていた。彼らは、上流・中流階級の出身で趣味の延長とはいうものの、熱心に田舎を訪れそこに住む人々から古くから伝わる歌を教えてもらい、書き取り、ソングブックとして出版し、失われていく伝統歌の保存に努めた。それぞれ個々の活動であり、歌を収集する地域やフォークソングに関する考え方もそれぞれ異なっていたのではあるが、文通や面会を介して大きなネットワークを形成するようになり、それが1898年にロンドンで結成されたFolk-Song Societyの設立につながるようになった。⁽¹⁾ 協会の目的としては、「フォークソング、バラッド、メロディーの発掘、収集、出版」(“Report” ii) が挙げられ、伝統歌が文化的遺産としての推奨されていく礎を築いた。

今までの研究では、ヴィクトリア朝後期のフォークリソングヴァイヴァル運動は、マルクス主義の観点から、労働者階級の文化であるフォークソングを知識階級が搾取しブルジョワジーの市場に取り込んだとして批判されてきた。例えば、性的な意味を含む歌の歌詞を、中流階級のドロワーイング・ルームに合うようにピアノ伴奏をもって大胆にも書き換えられた点は、Georgian BoyesやDavid Harkerによって批判的に論じられている。⁽²⁾ しかし、本稿では、これまで論じられてきたフォークソング・リヴァイヴァル運動の批判的な側面を論じつつも、収集家たちと個々の経験や歌手との関係性、さらには女性収集家の役割を分析することで、フォークリヴァイヴァル運動の再評価を試みる。都市化や産業化によって失われていく田園文化を守ろうとした彼らの行為は実践的な文化・社会運動であり、性別や階級の垣根が強かったヴィクトリア朝社会を考えるとフィールドワークを通じた交流は、非常に革新的な試みであったという事を論じていく。

II 目的

フォークソング・リヴァイヴァル運動が盛り上がる以前に、古謡への関心は、すでにヴィクトリア朝の知識人の間で享受されていた。1840年にはThe Percy Society、1868年にはThe Ballad Societyが結成され、バラッドや古い詩を中心に、収集・出版を進めた。The Percy Societyのメンバーであった、ウィリアム・チャペル(William Chappell, 1809-1888)は、中世から18世紀に至る、古謡や古舞踊を集めた*Popular Music of the Olden Times*を1859年に出版した。これは、イギリス音楽史に寄与した重要な著作であるが、後にフォークソング収集家で音楽家のセシル・シャープ(Cecil Sharp, 1859-1924)が、*A Book of British Song: For Home and School* (1902)の序文で「田園で今も歌われ、世代から世代へと歌い継がれている数多くのうたやダンスを集めようとしていない」(vi)と指摘したように、チャペルの手法は文献学であり、古事物研究の領域を超えてはいなかった。むしろ、フォークロアの領域では、すでに現存する過去に目を向けており、

文芸雑誌*Notes and Queries*を創設したウィリアム・ジョン・トムス (William J. Thoms, 1803-85) は、1846年8月22日の*Athenaeum*の中で、“Popular Antiquities”でも“Popular Literature”でもない“Folk-Lore”という言葉を考案した (“Folk-lore” 862-3)。これは、民衆の慣習、迷信、歌、伝説、ダンスを包括する、新たな学問の可能性を提示しており、同じく1846年9月19日の*Athenaeum*の中で、トムスは読者に次のように呼びかけている。

That there is a vast body of ‘traditionally lore’ floating among out peasantry, cannot be doubted. Our project in opening our columns to communications on the subject of Folk-Lore was, not to establish that fact, but to collect the legendary fragments themselves. (“Devonshire Pixies” 955-956)

トムスが提案した“Folk-lore”という言葉には、フィールドワークを基盤とした科学的な分析と実証が含まれており、文献だけに頼らない実践的な活動を通してこそ、伝承された文化がいかなる形で表現され、残されているのかを知る事ができると主張した。Dorsonは、これは現地での直接的な観察、正確な報告と具体的なデータ、他との比較を通した上で文献に遡っていくというフォークロア研究の基礎を築きあげたと指摘している (84)。フォークロア研究は、人類学や考古学といった新しく台頭してきた学問分野と関連しており、古事物研究に取ってかわるものであった。⁽³⁾ フォークソング収集家たちは、フォークロア研究の手法を積極的に取り入れており、文献中心の古事物研究とは一線を画していた。

フォークソング・リヴァイヴァル運動を促したもう一つの理由として、イギリスは、ドイツ、フランスやイタリアといったヨーロッパ諸国と比較した際に、自国の音楽文化に対して強い劣等感を持っていたことが挙げられる。自国に根付いた音楽文化を形成していないことから、イギリスを“land without music”⁽⁴⁾ と見なしていた。ドイツ人の音楽家で音楽学者のカール・エンゲル (Carl Engel, 1818-1882) は、1844-45年頃にイギリスに移住し、イギリスが他のヨーロッパ諸国に比べ音楽文化が乏しいことを*The Literature of National Music* (1878) の中で指摘している。エンゲルは、フォークソングという言葉がイギリスでまだ定着していなかったため、かわりに“National Music”を使用し、「国民を形成する下層階級、あるいは田舎に住む人々によって、伝統的に守られてきたメロディー」(Engel 1) がその国を特徴づける音楽をつくりだしていると論じた。その点において、イングランドでは他の国よりも劣っており、優秀な音楽家の多くは外国人であったと批判している (99)。解決策として、エンゲルは「都市に住む音楽家や音楽教師が、農民の口から伝わるメロディーを収集すること」(99-100) を推奨しており、彼らが実際に田舎に足を運び、村人の交流し歌に耳を傾けることで、創作活動において「充実した結果」(100) をもたらしことができると主張した。これは、フォークソング・リヴァイヴァル運動の活動の上で指針となりえた。フォークソング収集家の中には音楽家が多く、ルーシー・ブロードウッドやケイト・リーは、フォークソングコレクターであると同時に力量のある歌手であったし、セシル・シャープは、フォークソングの収集を始める前は、音楽教師として働いていた。エンゲルが、言葉よりもメロディーに関心を寄せていたように、フォークリヴァイヴァリストたちにとって、フォーク

ソングの「メロディーこそが大切であり、言葉にはそれほど注意を払わなかった」(Roud xvii)。これは、彼らが集めた言葉を、不適切な表現があった場合、大胆にも書き換えてしまう、時として極端な編集方法にもつながっていくのだが、エンゲルは、“land without music”というコンプレックスを抱いていたイングランドに、失われていく田園の中にもこそ音楽文化を豊かにするソースがあるという希望を見いだした。

III 活動

(1) 編集方法

デヴォン州の牧師で作家でもあるサビン・ベアリング＝グールド (Sabine Baring-Gould, 1834-1924) は、1888年頃からフォークソング収集を本格的に始め、フォークソング・リヴァイヴァル運動の先駆者の一人である。

ベアリング＝グールドの回想記 *Further Reminiscences*によると、1887年にダートムーアにある村で友人ダニエル・ラルフォードの家に滞在しているときに、デヴォン州にのこるフォークソングの話に話題がのぼった。彼は、少年の時にダートムーアをポニーで乗り回り、小さな宿に泊まったときに、男が煙草をふかしながらバラッドを歌っていたのを聴いた。そのことをラルフォードに話すと、次のような返答が返ってきた。「なあ、君こそがそれらの歌とメロディーを集める仕事に着手するべきだよ。すぐにやらなければいけないよ。さもなければ、数年の間で、これらは失われてしまうからね」(184)。友人の言葉はベアリング＝グールドを刺激し、フォークソング収集を始めることを決意した。ベアリング＝グールドはその志を次のように回想している。

I shall not forget my way back next day from Mount Tavy to Lew. My mind was in a ferment. I considered that I was on the outstand of a great and important work; and to this day, I consider that the recover of our West-country melodies has been the principal achievement of my life. (Further 184)

フォークソング収集を自分の人生における偉業として捉えているように、ベアリング＝グールドは、デヴォンやコーンウォールに住む人々から歌を多く集め、*Songs and Ballads of the West* (1891-1892) や *A Garland of Country Songs* (1895) といった本を出版し精力的に活動した。

ベアリング＝グールドの活動はヴィクトリア朝フォークソング・リヴァイヴァル運動の発展に寄与したものの、フォークソングに対して限定的な捉え方をしていた。*Songs and Ballads of the West*の序文の中で「メロディーは多くの点において言葉よりも貴重である」(8) と述べているように、メロディーと言葉を同等に扱ってはいなかった。つまり、ベアリング＝グールドは、口承伝統 (Oral Tradition) こそが、最も古く、価値のあるものだと考えており、それが文字化されたブロードサイド・バラッドは、断片的なテキストを完全に補うために必要ではあるが、二次的なものであり、それゆえ、口承伝統 (Oral tradition) の言葉の多くは、「ブロードサイド・バラッドが崩れたもの (corruptions of Broadside Ballads)」(*Further* 185) に成り果て、本来の

歌詞の意味が失われてしまっていると考えていた。この見方は、ヴィクトリア朝・エドワード朝のソングコレクターたちのブロードサイド・バラッドに対する一般的な見解であった。たとえば、ハーバード大学の英文学教授でバラッド研究者のフランシス・ジェイムス・チャイルド (Francis James Child 1825-96) はブロードサイド・バラッドを「一種の低級な芸術 (a low kind of art)」(Child 218) と称している。あるいは、セシル・シャープは、ブロードサイド・バラッドは田園に残る口承の歌よりも劣っていると指摘している (*Some Conclusions* 101)。しかし、収集された歌には、ブロードサイド・バラッドと一致しているものが多くあり、Gammonが指摘するように、「西洋社会において印刷文化に影響されない純粹たる口承文化は存在しない」(*Desire* 7) というのが現在の一般的な見解である。

言葉をメロディーよりも軽視するベアリング＝ゲールドのアプローチは極端な編集方法につながっていく。ベアリング＝ゲールドは、「ドロ잉・ルームに歌うのに適さない、卑猥な歌詞は書き直すことが必要である」(*Further* 189) ことを明言しており、手が増えられた歌は多岐に渡っている。その一つに、政略結婚によって若い娘が自分よりも年下の少年と結婚するが、夫に先立たれてしまうという歌、“The Trees They are So High”がある。以下は1888年にベアリング＝ゲールドが歌い手のJames Parsonから教えてもらったオリジナル原稿からの抜粋である。

At thirteen he married was
A father at fourteen
At fifteen he was already dead
And then his grave was green.
And the daises were outspread,
And the buttercups of gold,
He's my pretty lad so young, now ceases growing. (Baring-Gould, “The Trees They are so High” st. 7)⁽⁵⁾

この歌では、少年が13歳で結婚し、14歳で父親になり、15歳の若さで夭折し、年上の少女が未亡人として取り残されるという悲しい結末を迎える。しかし、ソングブックとして出版した際には結婚をする少年の年齢を17歳に引き上げ、18歳で父親になり、19歳で死を迎えるという設定に変えている。“At Seventeen he wedded was. /A father at eighteen. /At nineteenth his face was white as milk” (*Songs and Ballads*, “The Trees They are so High.” st. 8). この点において、ベアリング＝ゲールドは、注意書きの中で、口承伝統のバージョンでは少年の歳があまりにも若いのがドロ잉・ルームや演奏会でこの歌を歌いたいと思う読者に考慮してその箇所を書き換えたとして述べている (xiv)。

その他にも、*Songs and Ballads of the West* の中の68番に含まれている“Strawberry Fair”という歌は、性的表現を省き、大胆に書き換えを行なった。ソングブックの中では、苺を売りに市場に出かける若い娘に、男が一目惚れをして求婚をするという筋書きになっているが、口承伝統のバージョンでは、市場で何を売るとかと尋ねる男に、女が “I have a lock sir, she did

say/ If you have a key, then come this way/ As we go o to a strawberry field” (Baring-Gould, “Strawberry Fair” st.3) と答えている。⁽⁶⁾ Gregoryは、“lock”や“key”は娼婦を示唆する表現である (*The Late Victorian* 149) と指摘しており、女が性的に男性を挑発していることが読み取れる。

“The Trees They are So High” や“Strawberry Fair”といった歌が示すように、ベアリング＝グールドは、当時の中流階級向けの出版社を考慮しており、直接的な卑猥表現は道徳観念が問われる箇所として極力避けるという手法をとった。一方で、ベアリング＝グールドはフォークソングの編集に取りくむ際には、“folk-poet” のような感覚を持つことが重要である (*Further* 192) と力説しており、理想と現実という二つのジレンマがあったことが示唆できる。これは、他のフォークソング収集家にも共通して言えることであり、セシル・シャープは、友人への手紙の中で、“Cruel Mother”の中の“snow-white breast” という表現があまりにも「文学的に優れている」ために、不快な気持ちでその行を削除したと告白している (Sharp, Letter to Mr. Littleton)。⁽⁷⁾ しかし、フォークソング収集家たちが直面せざるえない矛盾を抱えながらも、ベアリング＝グールドは、自分の集めたコレクションに対して責任を持っており、オリジナルの原稿はExeter LibraryとPlymouth Institutionで閲覧できるということを明言している (*Songs and Ballads* 9)。ベアリング＝グールドの編集方法は問題があるとはいえ、オリジナル原稿に対する開放性を考慮すると、そこには欺瞞の意図はなく、妥協が図られていたと考えられる。ベアリング＝グールドの編集方法は、ヴィクトリア朝フォークリヴァイヴァル運動の批判される決定的な理由であり、フォークソングの本来の要素が失われてしまう危険性を孕んでいるが、失われていたであろう多くの歌を保存した点においては評価すべきではないだろうか。

(2) 女性フォークソング収集家の活躍

1890年代に入ると、*Songs and Ballads of the West* (1891-1892) や *Traditional Tunes* (1891) が出版され、フォークソング収集が世間の注目を集めるようになった。それに伴い、フォークソング収集家たちは、文通などで情報交換を行い、交流を深めていった。この流れの中で、顕著なのは、上流・中流階級出身の女性フォークソング収集家の活躍だ。その中心人物に、ピアノ製造業者で名高いブロードウッド家の一族の娘で歌手でもあるルーシー・ブロードウッド (Lucy Broadwood, 1858-1929) と Folk-Song Societyの初代幹事を務めたオペラ歌手のケイト・リー (Kate Lee, 1858-1904) がいた。

女性収集家が活躍した背景に三つの理由が考えられる。一つ目は、ブロードウッドやリーのような女性収集家が受けていた音楽教育にある。裕福な家庭で育ったブロードウッドは、幼少期からピアノやオルガン、歌のレッスンを受けていた (Val 33)。また、リーは、弁護士の妻で二人の息子の母親でありながら、1887年にRoyal College of Musicに入学し、声楽とピアノを学んだ。

(Bearman 628)。一般的に、オーストラリアの音楽家、パーシー・グレインジャー (Percy Grainger, 1882-1961) が1907年に蠟管式蓄音機を使ってイングランド各地のフォークソングを収集するまでは、収集家たちはメロディーを五線紙に書き写しており、高度な技能を要する困難な作業であった。そのため、音楽教育を受けていない男性収集家は、メロディーを書き取ることができない人の助けが必要であった。たとえば、ベアリング＝グールドは、牧師で音楽家のヘンリー・

フリート・シェパード (Henry Fleetwood Sheppard, 1824-1901) とペアを組み、シェパードが音符におこす作業を補った (Further 184)。あるいは、キッドソンは、「一度聴いたメロディーを正確に伝える」(Ethel Kidson 129) ことができる姪のエセルを同行させていた。一方で、専門的な音楽教育を身につけていた女性フォークソング収集家は、人の手を借りずにメロディーを書き取ることができた。

二つ目は、女性収集家のネットワークの広さにある。ブロードウッドは、フォークソング収集家であった叔父のジョン・ブロードウッド (John Broadwood, 1798-1864) が集めた伝統歌を編集した *Sussex Songs* を1890年に、イングランドの各地方の歌を集めた *English Country Songs* を1893年に出版しているが、その過程で、文通を通じて歌の提供者たちとの間で親交を深めた。同年には、ベアリング＝グールドやキッドソン面会をそれぞれ果たしており、その後も文通を続けた。さらには、Folk-Song Societyの創設に多大な貢献をしたのは、ロンドンを拠点とし、他の協会とのつながりが強かったブロードウッドとリーであった。ブロードウッドは、1905年3月14日に、王立音楽協会 (Royal Music Association) の会合で、“On the Collecting of English Folk Songs”というテーマの講演を行い、サセックスとサリーでの収集活動を紹介し、フォークソングとロンドンの音楽会をつなげる役割を果たした。リーは、1892年にthe Irish Literary Society、1898年にFolk-Lore Societyに加入しており、そこでフォークロア学者たちとの交流を深めた (Bearman 630)。彼女たちの繋がりにより、フォークロア研究者のアリス・ゴム (Alice Gomme, 1853-1938) や音楽家のジョン・アレクサンダー・フラー・メイトランド (John Alexander Fuller Maitland, 1856-1936)、Irish Literary Societyの会長を務めた詩人でフォークロア研究者のアルフレッド・パーシヴァル・グレイヴス (Alfred Perceval Graves, 1846-1931) らがthe Folk-Song Societyの会員になった。⁽⁸⁾ 女性収集家たちが築いたネットワークは、フォークソングの収集活動を組織化させる後押しとなっていく。

三つ目には、1890年に中産階級の女性たち間で広く普及した自転車の台頭があげられる。自転車の大衆化は、New Womanとの関わりでしばしば論じられているが、⁽⁹⁾ 女性フォークソング収集家の活動の促進にも貢献した。リーは、次のように回想している。

When I was bicycling in Berkshire, I stopped to have tea at a remote little-wayside inn, but the landlady was not particularly keen for me to remain, as she said she had a lot of lads singing in the parlour... I heard these lads wearily droning through a song which they sang together in unison, stamping their feet to the time. I afterwards recognized it at once, when I saw it in print, as being “Sweet William,” arranged in *English Country Songs*. (Lee, 7-8)

このように、自転車は、馬車に比べると、景色を隅々まで観察でき、人びととの触れ合いが可能であったという点で、フォークソング収集活動をより効果的にする役割を担っていた。さらには、女性フォークソング収集家にとっては、自転車は、男性のエスコートなしでも田舎を訪れ、フォークソングを集められる必須の手段であり、自由と独立心を象徴するものであった。

結婚をして子供を産むという当時の女性の典型的とされていた生き方から考えると、生涯独身を通したブロードウッドや家庭を持ちながら、歌手やフォークソング収集家としての両立を図ろうとしたリーの生き方は、既定された女性の社会的役割の枠組みにとらわれない革新さがあった。田舎に足を運び、階級の異なる人と接し、歌を集めるという女性フォークソング収集家の行為は、19世紀後半に出てきたNew Womanの女性像に重なる部分があるだろう。

すなわち、フォークソングを収集するという行為は、失われていく伝統歌を救い出すという社会的役割を担うだけではなく、女性にとっては、家庭という領域から離れた新しい領域を提供してくれるものでもあったのだ。

IV 歌い手との関係

フォークソング収集を批判的に捉える議論として、歌い手との関係性が一方的であったということが長らく言われてきた。E・P・トムスン は「イングランドの民俗学とは、大半が18、19世紀に残存していたものの文字による記録で、教区の牧師や生まれのよい尚古家が階級優劣の裂け目の彼方から観察し、記録したもの」(トムスン131)と述べており、いかに、フォークソング収集が部外者的かつ客観的な立場からの記録であったことを示唆している。また、ピーター・パークも、バラッドや民話、歌曲といったテキストを読むということは「修復されたゴシック教会建築」(パーク37)をみるようだと言及しており、本来そこにあった歌の姿とかけ離れて、媒介者である収集家の態度や価値観がテキストに色濃く反映されていることを指摘している。たしかに、収集家たちは、彼らの考える「フォークソング」、すなわち、田園にある純粋な伝統的な民衆文化であるかどうかという価値判断をもとに歌を選び、自らが属する階級のコンテクストにあわせて歌を作り変えるということをしてきた。収集家は、「声の文化」である民衆のうたを「書き言葉」に移し替える際に生じる歪みを克服することはできなかった。

しかしながら、収集家と歌い手の関係を考察してみると、決して、収集家が歌い手を一方的に支配するという構図が常に成り立っていたわけではない。Gammonは、「中産階級のレディやジェントルマンが、労働者階級の貧困層が覚えている歌を書き取るという行為は控えめに言っても、とても奇妙な社会的な出会いの形である」(“Folk Song” 65)⁽¹⁰⁾と述べているが、これは、収集家と歌い手の信頼関係や協力体制が整っていなければ、実現しえなかった。

ベアリング=グールドの回想記*Further Reminiscences*では、酒場で出会った歌い手の姿や様子が生き生きと描かれている。「歌うマシーン」というあだ名で呼ばれていた、植木と屋根葺きの職人であるジェイムズ・パーソンズ (James Parsons, 生没年不詳) とは、夜の酒場で知り合い、ベアリング=グールドに、夜明けまで歌を歌い続けられるかどうか賭け事を申し出た。そして、パーソンズは一晩かけて、見事に、膨大なレパートリーを歌い上げた (*Further* 188)。パーソンズとの交流は生涯にわたり続き、*Songs and Ballads of the West*では11曲もの歌を提供している。ベアリング=グールドは、歌を書き取るために、自宅であるマナーハウスに招いたとき、パーソンズは、豪華絢爛な部屋を見て「恐れて震えていた」(*Further* 197-198) が、しだいに慣れ、いつも通りに歌を提供することができた。パーソンズはベアリング=グールドに以下のように忠告す

る。

“You’ve gotten that note right. You must know that I’m the master and you’m [sic] the scholar; and I wi’n’t [sic] have any slurs or blunders. What is right is right, and what is wrong niver [sic] can be right to the world’s [sic] end. (*Further* 198、下線は引用者)

歌を介して、階級による上下関係はなくなり、歌い手と収集家という対等な協力関係が成り立っている。歌い手は、自分たちのレパートリーに確固たる誇りと自信を持っており、歌を提供することに、喜びとともに使命感を持っていることが示唆できるであろう。また、ブロードウッドや音楽家のラルフ・ヴォーン・ウィリアムズ (Ralph Vaughan Williams, 1872–1958) に歌を提供した、サセックスのホーシャムに暮らしていた靴と鐘職人のヘンリー・バーストウ (Henry Burstow, 1826-1916) は、1911年の回想記 *Reminiscences of Horsham* の中で、幼少期から口承で培った420曲ものレパートリーを、伝統音楽を保護する目的で収集されることは「喜ばしい」 (Burstow 108) と述べており、歌が価値のあるものとして認められ、記録として残ることへの満足感をあらわしている。⁽¹¹⁾ このように、歌い手と収集家の間には、伝統歌を後世に残していこうとする目的を共有しようとする意識が少なからず働いていたといえる。

一方で、行動に厳しい制約があったヴィクトリア朝時代の女性収集家は、歌い手の領域である酒場や仕事場には男性収集家のように気軽に足を踏み入れることはできず、歌い手との交流において不利な立場に置かれていた。女性収集家は、歌い手を自宅や知人宅に招き、歌を収集することが多かったのだが、関係性の薄さから、問題が生じることが度々あった。リーは、Folk-Song Societyの機関紙 (1899年) の中で、1896年頃にフォークソング収集を始めた当初は、歌を集めることの難しさを告白しており、たとえば、ノーフォーク州の港町に住む歌い手を自宅に呼んだ際に歌い手は正装して臨んだが、あまりの緊張で震え、歌え始めたときには「一言も発声することができなかった」 (Lee 9)。これは、女性収集家が、社会的には上流または中流階級のレディという立場であったので、男性収集家よりも階級による障壁が強く作用していたためと考えられる。ルーシー・ブロードウッドは、サリー州の荷馬車屋の老人に歌を教えてもらっている最中に、老人は歌うのを突然辞め、次のようなことを告げた。

“I know a wonderful deal more, but they are not very good ones. Most of them be [sic] outway rude.” (“On the Collecting” 101、下線は引用者)

ブロードウッドは、フォークソングの歌詞にある「卑猥さ (rudeness)」 (“On the Collecting” 101) こそが、女性収集家が歌を集めることを妨げていると指摘しており、歌い手の「レディ」に対する思慮深さと親切心が、「卑猥」な歌を意図的に教えないという態度につながった。あるいは、バーストウが “Gilderoy” という歌を手紙でブロードウッド宛てに送ったときに、「あえて言わせていただければ、いくつかの歌詞は変えて頂けて結構です」と添えているように、歌い手の方から「卑

猥」な歌詞を削除するよう暗に示すこともあった (Burstow, Letter to Lucy Broadwood)。(12)

「酒場でパイプを吹かし、パースニップワインを飲みながら、歌い手と陽気に騒ぐことができる特権的な男性収集家」(“On the Collecting” 95) を羨む一方で、女性収集家は、徐々に、独自の手法を使って、歌い手との距離を縮めようと試みた。リーは、「歌い手の歌を始めから終わりまで聴くこと」と「歌い手とともに歌うこと」(Lee 11) を推奨しており、そうすることで、歌い手との関係性を構築できると考えた。また、ブロードウッドは、歌い手が歌った曲をピアノで即興演奏することで、歌い手を非常に喜ばし多くの歌を教えてもらった (“On the Collecting” 101)。女性収集家は、歌を「書き取る」という行為を重視する一方で、歌い手の「パフォーマンス」に積極的に関与し男子収集家との性差による障害を克服しようとした。

このように、収集家と歌い手の関係は、今まで指摘されてきたような一方的な支配関係ではなく、むしろ、歌い手側の自発性や意志、あるいは、歌い手の属する農村社会のルールやしきたりが収集活動に大きな影響力をもたらしていたことがわかる。収集家と歌い手の関係は、フォークソングを介して展開される、相互理解にむけての葛藤と限界、そして解決への糸口を見いだすための交わりであったと解釈ができる。

結論

1880年代後半から1890年代に盛り上がったフォークソング収集は、人類学や考古学、フォークロア研究といった学問が台頭していく中でうまれたフィールドワークを中心とする新しい分野であり、産業化による農村の荒廃とそれの伴う伝統歌の衰退への危機感と結びついたことにより、社会・文化的運動としての機能を帯びるようになったと言える。確かに、これまで論じたように、編集方法において、フォークソング収集家たちは、彼らが属するブルジョワ社会の価値観に合わせてフォークソングを作り変えるということをしており、収集家の先入観を完全には拭い去ることはできなかった。しかし、収集場所やフォークソング観がそれぞれ異なっていたにもかかわらず、収集家たちは、伝統歌に対する並外れた情熱と信念によって共通点を見出し、Folk-Song Societyという組織を通して、集めた歌を共有できる場を創り出した。さらに、本稿では、収集家と歌い手との交流を、回想録や手紙といった文献を通して分析することで、階級やジェンダーという障壁に直面し葛藤しながらも、歩み寄り理解していこうとする、新たな関係性を明らかにする試みをした。

したがって、ヴィクトリア朝後期のフォークソング収集は、上流・中流階級による「暇つぶし」(Boyes 42) だと言われてきたが、収集家たちが書き留めた膨大な歌の数々が示しているように、趣味を超えた実践的な社会・文化運動であった。彼らの貢献なしでは、田園に残っていた伝統歌の多くは消滅していたと言っても過言ではない。セシル・シャープは、1906年にフォークソングを初等教育の音楽カリキュラムに導入する際の歌のリストをめぐって、*Daily Chronicle*の紙面で、教育委員会と大論争を引き起こしたが、そこでシャープが主張したことの一つに、キッドソン、ルーシー・ブロードウッド、ベアリング＝グールドといったフォークソング収集家たちによって発見された歌を使用することが挙げられた (Sharp, “English Folk”)。これは、ヴィクトリア朝

後期に収集された伝統歌が、いかに、イングランドの音楽文化を豊かにする可能性を担っていたのかを示しているだろう。また、1950年代から1960年代に再びロンドンを中心にフォークソング・リヴァイヴァル運動が勃興した際に、中心人物の一人であった学者で歌手、音楽プロデューサーのA. L. ロイド (1908-1982) は、フォークソングに田園のイメージのみを重ねようとするヴィクトリア朝後期のフォークソング収集家たちに懐疑的であったが、彼らが集めた歌を貴重なレパートリーとして積極的に取り入れていった。⁽¹³⁾ ヴィクトリア朝後期に収集されたフォークソングが、過去と現在をつなぐ連続性のあるものとして、どのようにイングランドの音楽文化の中で受け継がれていったのかは今後の課題としたい。

注

- (1) Folk-Song Societyにはフランク・キッドソン、ケイト・リー、ルーシー・ブロードウッドのほか、音楽家のチャールズ・ヒューバート・パリー (Charles Hubert Parry, 1848-1918)、チャールズ・ウィリアーズ・スタンフォード (Charles Villiers Stanford, 1854-1924) らが会員であった。Folk-Song Societyは、1932年にthe English Folk Dance Societyと合体して現English Folk Dance and Song Societyになった。
- (2) Harker 165-169; Boyes 3-18参照。
- (3) 人類学と考古学がFolk-Lore Societyにどのように関与したかはWingfield 255-274参照。
- (4) この蔑称は、ドイツの音楽評論家オスカー・シュミッツ (Oscar Schmitz 1873-1931) の著書 *Das Land ohne Musik: : Englische Gesellschaftsprobleme* (1904) の英訳に由来する。
- (5) この歌の元のバージョンはロンドンのVaughan Williams Libraryで保管されている資料を参考にした。Sabine-Baring Gould Manuscript Collection (SBG/2/2/11)
- (6) Sabine Baring Gould Collection Manuscript Collection (SBG/2/1/164) 参照。ベアリング=グールドの改作した歌についてはReeves 5-8が詳しい。
- (7) 手紙の原本は、Vaughan Williams Libraryで保管されているSharp Correspondence Box 2を閲覧した。
- (8) ブロードウッドとリーがFolk-Song Societyにどのように貢献したかは、Gregory, "Pioneers" 181参照。
- (9) 自転車とNew Womanの関わりについてはRubinstein 47-71参照。
- (10) Gammonの調査によると、サリー州とサセックス州でルーシー・ブロードウッドが集めた歌い手53人の職業を例に統計にとると、27人、すなわち、51%が農業労働者・工場労働者であり、農村社会の中でも貧困層にあたる人たちが歌を提供していると指摘している。Gammon, "Folk Song" 64参照。
- (11) *Reminiscences of Horsham*は、ホーシャムの実業家アルベリーが1911年にバーストウの回想をもとに書き付け、バーストウの名で出版したものである。遠藤121項参照。ヴォーン・ウィリアムズは1903年から1913年までイングランドに残るフォークソングを収集した。ヴォーン・ウィリアムズとフォークソングの関わりについてはVal 157-161参照。
- (12) Vaughan Williams Libraryで保管されている手紙の原本はLucy Broadwood Manuscript Collection (LEB/2/10/2) 参照。
- (13) A. L. Lloyd は、フォークソングは田園に根付いていただけではなく、産業革命以後は炭坑や工場のある地域にも、フォークソングが労働者によって創られていたと指摘している。Lloyd 31参照。しかし、後期ヴィクトリア朝・エドワード朝のフォークソング収集家のコレクションやチャイルドのバラッド集をもとに、*The Bird in the Bush: Traditional Erotic Folk Songs* (1966) や*England & Her Traditional Songs: A Selection from the Penguin Book of English Folk Songs* (1959) といったLPレコードを作り、音楽として再現させた。

参考文献

- Baring-Gould, Sabine. *Further Reminiscences: 1864-1894*. London: John Lane, 1925.
- . "Strawberry Fairs." n.d. Sabine Baring-Gould Manuscript Collection (SBG/2/164) . Vaughan Williams Lib., London.

- . "The Trees They are so High." n.d. Sabine Baring-Gould Manuscript Collection (SBG/2/2/11) . Vaughan Williams Lib., London.
- Baring-Gould, Sabine and H. Fleetwood Sheppard, eds. *Songs and Ballads of the West: A Collection Made from the Mouths of the People*. London: Methuen, 1891.
- Bearman, C. J. "Kate Lee and the Foundation of the Folk Song Society." *Folk Music Journal* 7.5:627-643.
- Boyes, Georgiana. *The Imagined Village: Culture, Ideology and the English Folk Revival*. Manchester: Manchester UP, 1993.
- Broadwood, Lucy. "On the Collecting of English Folk-Song." *Proceedings of the Royal Music Association* 31 (1905): 89-109
- , "Obituary: Frank Kidson." *Journal of the Folk-Song Society* 8.31 (1927) : 48-49.
- Burstow, Henry. Letter to Lucy Broadwood. 1894. Lucy Broadwood Manuscript Collection. (LEB/2/10/2) , Vaughan Williams Lib., London.
- . *Reminiscences of Horsham, being Recollections of Henry Burstow, the celebrated bellringer and songsinger*. Horsham: The Christian Church Book Society, 1911.
- Child, James Francis. "Ballad Poetry: Johnson's Universal Cyclopædia, 1900." *Journal of Folklore Research* 31.1 (1994) : 224-222.
- Dorson, Richard Mercer. *History of British Folklore*. London: Routledge & Kegan Paul, 1968.
- Engel, Carl. *The Literature of National Music*. London: Novello, 1879.
- Francmanis, John. "The Roving Artist: Frank Kidson, Pioneer Song Collector." *Folk Song Journal* 8.1 (2001) : 41-66.
- Gregory, Dave. *The Late Victorian Folksong Revival: The Persistence of English Melody: 1978-1903*. Lanham: Scarecrow Press, 2010.
- . "Pioneers, Friends and Rivals: Social Networks and Folk-Song Revival." *The Voice of the People: Writing the European Folk Revival, 1760-1914*. Eds. Matthew Campbell and Michael Perraudin, London: Anthem, 2013.
- Gammon, Vic. *Desire, Drink and Death in English Folk and Vernacular Song, 1600-1900*. Aldershot: Ashgate, 2008.
- . "Folk Song Collecting in Sussex and Surrey, 1843-1914." *History Workshop* 10 (1980) : 61-89.
- Harker, Dave. *Fake Song: The Manufacture of British 'folksong' 1700 to the Present Day*. Milton Keynes: Open UP, 1985.
- Lee, Kate. "Some Experiences of Folk-Song Collector." *Journal of the Folk Song Society* 1.1 (1899) : 7-25.
- Lloyd, A. L. *Folk Song in England*. London: Lawrence & Wishart, 1967.
- Reeves, James. *The Everlasting Circle: English Traditional Verse*. 1960. London: Faber and Faber, 2008.
- . "Report of the First General Meeting." *Journal of the Folk Song Society* 1.1 (1899) : vi-vii.
- Roud, Steve and Julia Bishop. Introduction. *The New Penguin Book of English Folk Songs* Oxford: Oxford UP, 2005.
- Rubinstein, David. "Cycling in the 1890s." *Victorian Studies* 21.1 (1977) : 47-71.
- Sharp, Cecil. *A Book of British Song: for Home and School*. London: John Murray, 1902.
- . "English Folk Songs for School: Education Board's Mistakes." *Daily Chronicle* 22 May 1906.
- . *English Folk Songs, Some Conclusions*. London: Simpkin, 1907.
- . Letter to Mr. Littleton. 19 March, 1919. Sharp Correspondence Box 2. Vaughan Williams Lib., London.
- Thoms, J. William, "Folk-lore." *Athenaeum* 22 August, 1846 : 862-3.
- . "Devonshire Pixies." *Athenaeum* 19 September, 1846: 955-56.
- Val, de Dorothy. *In Search of Song: The Life and Times of Lucy Broadwood*. Farnham: Ashgate, 2014.
- Wingfield, Chris and Chris Gosden. "An Imperialist Folklore? Establishing Folk-Lore Society in London." *Folklore and Nationalism in Europe During the Long Nineteenth Century*. Eds. Timothy Baycroft and David Hopkin, Leiden: Brill, 2012, 255-274.
- エドワード・P・トムスン「民俗学、人類学、社会史」『思想』近藤和彦訳、岩波書店、1987年7月号、127-149項。

[Thompson, E. P. "Folklore, Anthropology, and Social History." *Indian Historical Review* 3 (1978) : 247-266.]

遠藤美幸「イギリスの「フォークソング・ムーヴメント」にみる文化的屈折：L. ブロードウッド の収集活動を中心にして」『三田学会雑誌』 第86巻3号、277-192項。

ピーター・パーク『ヨーロッパの民衆文化』 中村賢二郎、谷泰訳、人文書院、1988年。

[Burke, Peter. *Popular Culture in Early Modern Europe*. 1978. Farnham: Ashgate, 2009.]

(英文学専攻 博士課程後期 3 年)